

企業生活研究所が投じた一石

——サントリー不易流行研究所の足跡——

伊 木 稔

1. はじめに

酒類・食品を事業の柱とするサントリーグループは、一八九九年の創業以来、顧客・社会とのかかわり・コミュニケーションを重視し、本来のビジネスだけでなく、さまざまな文化・社会活動を通じた社会貢献を行ってきた。

創業九〇周年にあたる一九八九年には、記念事業の一環として不易流行研究所という生活研究所を設立し、サントリーが有するノウハウと研究所の活動を通じて日本の生活文化の発展に寄与しようとした。

同研究所は、部長以下数名の社内スタッフによる小さな研究所であるが、名称・テーマの独自性、社内外のネットワークの形成、積極的

な情報発信によって、関連の学者・研究者、企業、マスコミ、行政等から一定の評価を受け、十数年間活動を展開した。その後二〇〇五年に次世代研究所と名称を変更して、二〇〇八年の解散に至るまでおよそ二〇年間にわたって活動を継続した。

本稿では、筆者が在籍した不易流行研究所時代に焦点を当て、同研究所の活動内容とその特色、研究活動の成果と企業および社会に果たした役割を考察したい。

同研究所が発足した八〇年代は、多くの企業生活研究所が生まれた時期でもあった。表1からわかるように、七〇年代以前から花王・ポーラ化粧品など一部の企業の先駆的活動が見られたが、八〇～九〇

〈表1〉主な企業の生活研究所一覧

業種	企業	研究所名	設立
製造業	食品	雪印乳業	健康生活研究所
		すかいらーく	(財)すかいらーくフードサイエンス研究所
		味の素	(財)味の素 食の文化センター
		サントリー	不易流行研究所
		福寿園	CHA研究センター
		日清製油	生活科学研究室
		ミツカン	ミツカン水の文化センター
		キッコーマン	キッコーマン国際食文化研究センター
		アサヒビール	アサヒビールお客様生活文化研究所
	住宅	旭化成	二世帯住宅研究所
		三井ホーム	都市住宅研究所
		旭化成	共働き家族研究所
		積水ハウス	総合住宅研究所
		長谷工エコーポレーション	(株)長谷工総合研究所
		東急コミュニティ	マンション文化センター
	衣	ワコール	ワコール人間科学研究所
		ワコール	京都服飾文化研究財団
		グンゼ	快適工房
	化学	花王	花王生活文化研究所
		ポーラ化粧品	ポーラ文化研究所
		資生堂	資生堂ビューティサイエンス研究所
		ダスキン	暮らしの快適化生活研究所
	電気・機械	シャープ	生活ソフト企画センター
		オムロン	ヒューマン・ルネサンス研究所
		松下電器	くらし研究所
		松下電工・ロフテ	睡眠文化研究所
		ユニカミルテクノロジーセンター	イメージング文化研究所
	その他	コクヨ	オフィス研究所
		内田洋行	知的生産性研究所
	エネルギー	東京ガス	都市生活研究所
		大阪ガス	エネルギー・文化研究所
	流通	東急グループ	東急総合研究所
		アートコーポレーション	引越し文化研究所
		千趣会	ベルメゾン生活スタイル研究所
	出版・広告	博報堂	博報堂生活総合研究所
		電通	電通総研
		リクルート	ワークス研究所
	情報・教育・サービス	JTB	(財)日本交通公社
		NHK	放送文化研究所
		ベネッセ	ベネッセ未来教育センター
		公文式	くもん子ども研究所
		ぴあ	ぴあ総合研究所株式会社
		第一生命	(株)第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
		日本生命	ニッセイ基礎研究所
		NTTデータ通信	システム科学研究所
		ライブリッジ	くらしHOW研究所
		近畿日本ツーリスト	旅の文化研究所
		NTTドコモ	モバイル社会研究所

2004年 サントリー-不易流行研究所調べ

年代になって、幅広い業種にわたる多くの企業が生活研究所を開設している。直接商品開発や事業関連の技術開発に結び付く研究ではなく、生活全般あるいは生活文化の研究を目的とした研究所が、主に消費財・サービス関連の企業によって数多く設立されたのである。

その背景には、高度経済成長を経てモノの面で豊かになった人々が、心の豊かさを求める段階に到達し、新しい生活文化の時代を迎えたという時代の潮流があるだろう。消費という行為も、マスとしてあるいは平均像として見るだけでなく、多様な顔と心を持った個人の生活と人生という視点からアプローチする必要がある企業にも求められるようになったのである。こうした時代の流れ・空気の変化を捉えるための一つの試みが企業による生活研究である。

生活研究所といっても、そのミッションは企業によって異なり、本業・ビジネスへの側面的貢献や経営トップへの知恵袋的役割を期待されているものから、文化・社会活動として社会への情報発信やコミュニケーションにウェイトを置くものまでさまざまである。しかし一九九〇年と二〇〇四年に主な企業生活研究所を対象にサントリー不易流行研究所が実施したヒアリング調査によれば、いずれか一方の役割に徹するという研究所は少なく、多くの生活研究所がこの両者の役割の狭間で、研究テーマの選択・活動成果の発信に工夫を凝らしているというのが実情であった。

サントリー不易流行研究所の場合は、九〇年代から二一世紀に向けての生活像を探索し、よりよい社会実現のための問題提起と提案を行

うということが創設のミッションであり、本業のビジネスとは一線を画していた。とはいえ、企業の文化・社会活動である以上、企業の個性・持ち味が反映することは当然であり、そうでなければ社会にとつて有意義な活動もできない。

創設者の佐治敬三（当時サントリー社長）は、「生活文化企業」を経営理念に掲げ、酒も食も文化であり、音楽・美術も文化。生活を楽しく豊かにするものが文化だから、その根底にあるもの・本質的なものをつかんで、形にすることが生活文化企業の使命だと語っていた。その役割の一端を担うことを期待されていたのが、不易流行研究所という名の生活文化研究所である。

2. 設立の経緯

サントリー創業九〇周年記念事業の一つとして、社会に情報を発信する文化研究所を開設するという構想は、当初社内を生産・研究部門が中心となって進められていた。通常よく見られる例のように、企業の事業分野を中心にテーマを絞り、文化・社会的研究を行うというもので、サントリーの場合は酒文化研究所というイメージであった。

「酒と人間」というのは、歴史的に見ても世界的に見ても壮大で魅力的なテーマであり、かつサントリー社内には、酒類専門の研究所やウイスキー・ワイン・ビールの各工場には研究室・展示室などがあり、酒文化に関する長年にわたって蓄積されたノウハウ・人材を有し

ている。それらをつましく編集・活用すれば、社会にとっても有益な情報が発信できるのではないかというのが当初の構想であり、そのための準備も関係者の間で進んでいた。

ところが、当時の社長佐治敬三はその案に満足せず、酒だけではなく広く生活文化の研究により、これからの時代に貢献する情報を発信すべしとの方向性を指示し、その名称も平凡な生活文化研究所ではなく、諸案の中から「不易流行研究所」に決定した。こういう点にも、常に「エトバス・ノイエス（サムシング・ニュー）」を求め、前例の踏襲を嫌い、日々新たに新分野にチャレンジするという彼の「やってみなはれ」精神が現れている。

「不易流行」というのは、江戸時代の俳人松尾芭蕉が唱えた句作に当たつての理念であり、芭蕉の高弟服部土芳が著わした「三冊子」の記述に拠っている。「師の風雅に万代不易あり。一時の変化あり。この二つに究り、其本一なり。」

すなわち、不易とは世の中の森羅万象を貫く不変の法則・時を超えた真理であり、流行とは変化を促す新しさであり、しかもその元は一つ。不易が流行を生み、流行が不易を動かす。俳諧芸術の場合、それは「風雅の誠」と表現される。

詩人の大岡信に伺った話では、芭蕉は生涯「新しき」を重視し、奥の細道の紀行を経て、晩年の「軽み」の境地に到るまで、変化・挑戦を続けた芸術家であった。しかもその作品は時を超えて、今日の人々の心を打つもので、まさに不易流行を体現している。

このような不易流行の精神で生活研究にチャレンジするというのが研究所創設者佐治敬三の意図であつた。²⁾ 生活の変化を川の流れにたとえれば、水面にあらわれる波や渦が流行で、それは底を流れる川の流れと一体のものであり、表面の波や渦（流行的変化）を深く観察することによって、川の流れの方向（本質的变化）を洞察・発見することの意味する。余談になるが、まだ発足当初で、研究成果もない時期に、研究所のユニークな名称と理念・方針の説明だけで報道関係はじめ各界の方々の注目を集め、情報発信ができたのは、思いがけない効果であつた。

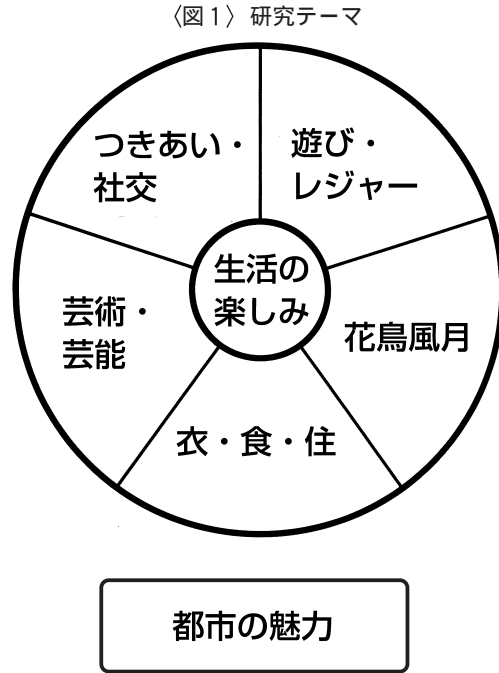
英文名称を考えるのも難題であつたが、たまたまハーバード大学のダニエル・ベル教授が来日の折に、コロンビア大学名誉教授のハーバート・パッシンを交え懇談の機会があり、不易流行研究所の話をしたところ興味を持っていたが、その場で、Suntory Research Institute on Continuity and Change in Life という案がまとまつた。

研究テーマは、生活の楽しみを中心とした生活文化の研究であり、図1に示した5つの分野を設定した。設立時のパンフレットにはこう記されている。「当研究所は、衣・食・住をはじめ、遊び、つきあい、自然や芸術の楽しみに至るまで、生活の中のさまざまな〈楽しみ〉にスポットをあてて、二世紀に向けての豊かな生活像を、長期的かつ幅広い視野から研究します。」

そして、これからの時代の生活文化の重要な舞台となる〈都市〉について、生活文化の視点からその魅力・意義を探ることを課題とし

た。

組織的には、トップ直属とし、所長は社長の佐治敬三、副所長に生産・研究部門の役員である西沢力、マネジャーとして部長伊木稔、課長佐藤友美子、スタッフは経営企画部門、生産・研究部門等から六名（男性四名、女性二名）が専任で配属され、大阪堂島のサントリー本社近くのビルのワンフロアを借りて、平成元年（一九八九）五月二日に発足した。



「不易流行研究所年報」（1991年）より

3. 研究活動始動

専任メンバーが部長以下八名という小さな所帯であったが、研究所としての形は整えられた。新しい革袋には、新しい酒を盛らなければならぬ。ところが、研究というものは、酒と同じで一朝一夕にはでき上がらない。十分な仕込みと発酵と熟成の時間が必要である。

研究テーマごとに、ある程度土地勘があり着手可能な具体的プロジェクトがスタッフ全員の協議により設定された。

「つきあい・社交」では、家庭内の行事・集いの文化・都市生活におけるつきあいという三つの切り口から日本人のつきあい文化を探ることにした。

「遊び・レジャー」では、スポーツの楽しみ・日本型リゾートに焦点を当てた。

「芸術・芸能」では、文化施設の中から劇場を取り上げ、合わせて企業と文化の関係についてもリサーチすることとした。

「花鳥風月」では、一九九〇年がちょうど大阪で「国際花と緑の博覧会」が開催される年であったので、花をテーマに取り上げた。

「衣・食・住」では、まず酒・食の文化を、「都市の魅力」では地元大阪をテーマに着手することは自然であった。

企業内研究所とは言え、ほとんどゼロからの出発だったので、スタッフ自身が切磋琢磨、学びながら調査・研究を進めるといったスタイルであった。関連の文献・資料の収集・分析にはすぐに着手したが、新しい研究所としてとりわけ、チームワーク・ネットワーク・フット

ワークに力を注いだ。

チームワークの面では、少人数のためすべてのプロジェクトにほとんどメンバー全員が関わり、また問題意識を共有するためにテーマに関する各界の専門家を招いて月例研究会を実施した。この研究会には社内関係部署や役員もテーマに応じて参加した。ゲストに招いた方々にはその後もお世話になり、ネットワーク型の研究活動をすすめる起点ともなった。

ネットワークの面では、サントリーという企業グループ各部門のバックアップに負うところが大きかった。トップ直属研究所という位置づけのため、経営企画・広報、生産・研究、各事業部門が有するネットワークを活用できた。特にサントリー文化財団に関わる先生方には、筆者の前任部署ということもあり、大変助けていただいた。不易流行研究所発足以前、サントリー文化財団内には、生活文化研究所という内部組織があり、山崎正和大阪大学教授・高坂正堯京都大学教授・森口親司大阪大学教授・蟬山昌一大阪大学教授を中心に活発な研究活動を展開していた。その中の重要なテーマであった「都市の時代」と「ライフデザイン」は、成果がそれぞれ書物にまとめられ、出版されており、不易流行研究所の先導となるものであった。⁽³⁾

社外のネットワークで重視したのは、他企業の生活研究所との交流である。

ポラ文化研究所、東芝生活文化研究所、大阪ガスエネルギー・文化研究所、旭化成共働き家族研究所、東京ガス都市生活研究所などと

の異業種・異分野の生活文化を探る視点・調査のノウハウの交換は、大いに刺激となり有益であった。

フットワークの面では、生きた生活研究には現場観察が不可欠との観点から、月例研究会でもお世話になった大阪市立大学の谷直樹助教にお願ひして、若手メンバーを中心にフィールドワークの手ほどきを受けることができた。都市大阪の魅力をテーマに二年間にわたって大学のゼミナールのように、都市問題専門家を招いての勉強会や大阪市内のタウンウォッチング・祭りの実地調査などのフィールドワークを重ね、全員が担当のレポートを作成し「都市はステージ」と題する報告書にまとめることができた。⁽⁴⁾

このプロジェクトは、研究所スタート時におけるスタッフの研究・調査能力養成に多大の効果があつたばかりでなく、ゲストとしてお招きした米山俊直京都大学名誉教授を中心に、「都市と文化施設」というプロジェクトが立ち上がる契機ともなった。

4. 「花鳥風月」と日本人

当初設定したテーマについてそれぞれプロジェクトが並行してスタートしたが、折しも花の万博の年でもあり、「花鳥風月」のなかの花と日本人を取り上げた研究の成果を世に発信することになった。

この研究プロジェクトは、国立民族学博物館の守屋毅助教授を主査とし、日本人の自然観や、日本人の生活と自然との関係を花に焦点を

当てて考察するものである。古代以来の歴史的変遷や海外との比較検討とともに、現代人の花意識を探るために、コンクール方式で一般の方から花にまつわる思い出をテーマにしたエッセイを新聞広告により募集した。全国から二六七編の作品が寄せられ、現代日本人の生活・人生における花の意味をうかがう貴重なデータとなった。⁽⁵⁾

花の研究をもとに、一九九〇年六月研究所設立一周年を記念してフォーラム「花を楽しむ」を大阪の都ホテルで開催した。所長佐治敬三の開会挨拶の後、基調講演は詩人で東京芸術大学教授の大岡信による「花の不易と流行」、パネル・トークには、和歌山大学名誉教授の角山栄、草月会一級師範の福島光加が加わり、守屋毅のコーディネートで、三〇〇人の参加者とともに花を語り花を楽しむサロンとなった。

このフォーラムをもとに、「花の不易と流行」という研究報告書を九一年一月に発行している。⁽⁶⁾ 萩・梅・桜が好まれた万葉の時代から、バラ・桜・コスモス・ランが人気の現代まで、花の好みは変わつても、花見や生け花に見られるように、花を愛で花を楽しむ日本人の心は不易だと確信できたプロジェクトであった。

5. 遊び・レジャーと生活文化

遊び・レジャーの分野では、余暇活動が増大する今後の社会を展望して、まずスポーツと日本型リゾートの二つのテーマを取り上げた。

(1) スポーツの楽しみ

「スポーツの楽しみ」プロジェクトは、九〇年二月から二年半の間継続した。大阪大学社会経済研究所の森口親司教授を座長として、井原哲夫慶應義塾大学教授（サービス経済学）、木下富雄京都大学教授（社会心理学）、坂野信義シアトル国際短期大学学長、白幡洋三郎国際日本文化研究センター助教授（都市文化史）、守屋毅国立民族学博物館教授（日本文化史）、山田誠神戸市外国語大学教授（レジャー）というメンバーに加え、関連各界から専門家をゲストとして招き活発な学際的議論を重ねた。

また、森口・山田教授と研究所スタッフを中心に、アンケート調査・グループインタビューなどにより現代人のスポーツに関する意識調査を実施するとともに、生活の中でスポーツを楽しむ人々の実態を探索する現地調査を数回実施した。

これらの調査・研究から明らかになった成果をまとめ、報告書「スポーツのある生活」、単行本『スポーツという文化』⁽⁸⁾として発行した。それとともに、「スポーツがひろげる世界」と題するビデオを制作し、九一年十月大阪市の大阪国際交流センター、九二年七月東京の原宿クエストで開催した公開フォーラム等で披露した。

不易流行の視点からスポーツを考えると、ポイントは大きく二つあり、一つは古今東西のスポーツの歴史と発展から人間にとってのスポーツの本質的意味を探ることであり、この点は単行本『スポーツという文化』のメインテーマとなっている。その中で森口親司教授は次

のように述べている。「ものをつくり、食べ、そして道具を發明し、経済的に進化してきた人間の歴史の中で、ついに『遊び』をルール化し、楽しむようになったのが近代であり、そして有閑階層の独占物だった遊びを大衆が楽しむようになったのが現代だ。(中略)恋愛や芸術と同じく、スポーツも現代人が必要とする精神浄化作用を提供しているといえる。」

もう一つのポイントは、現代人の生活におけるスポーツの意味・役割であり、この点について二年余りの調査で明らかになったことをまとめたのが、報告書「スポーツのある生活」である。今日スポーツは、力と技を競う競技・心身を鍛える鍛錬といったイメージから、誰でも楽しめるものへと変わりつつある。スポーツをめぐる楽しみも「する」「観る」だけでなく、「聴く」「読む」「語る」「着る」「食べる・飲む」といったさまざまな生活の中の場面に広がっている。時代を反映した楽しめるスポーツや新しいスポーツが人気を呼んでいる。余暇・自由時間が増大するこれからの社会において、生活文化としてのスポーツの果たす役割は大きいものがあると考えられる。

(2) もてなし文化

日本型リゾートの研究プロジェクトは、レジャーの根底となる日本人が心からくつろげる快適なもてなし空間・サービスとは何かという問題意識でスタートした。古来日本人がその美意識と感性で培ってきた「もてなし文化」の真髄を不易流行の視点から評価・検討し、これ

からの新しいもてなし文化の方向性を探ろうとするものである。

研究のガイド・アドバイザー役として、消費動向の深層分析に詳しい多摩大学星野克美教授の熱心な協力を得ることができた。二年間にわたって、文献・資料に基づく議論、ホテル・レストランからテーマパーク・ミュージアム・ホールにいたる現代の先端的なもてなし文化の現場観察、ならびに京都の寺院・旅館・料亭・茶室などの伝統的なもてなし文化の調査を実施した。

研究成果は、九一年十二月に単行本『もてなし文化』ルネッサンス——新・日本型サービスをどう創造するか——として刊行した。⁽¹⁰⁾あわせて、星野教授とゲストの建築家毛綱毅曠による公開トークサロン「日本のもてなし文化」を東京紀尾井町のザ・フォーラムにおいて開催した。

日本のもてなし文化の特色は、人によるホスピタリティ・サービスだけでなく、自然・空間・装置という要素を巧みに組み合わせるといふものである。料亭や草庵茶会に見られるもてなしの心、日本庭園に象徴される自然と一体化し融和する自然観、日本建築が醸し出す融通無碍・変幻自在な空間活用、香道・水琴窟・声明・遣り水といった五感を快く刺激する装置の工夫等が、日本の生活文化の遺伝子として受け継がれてきた。

こうしたもてなし文化の真髄を、現代の芸術・文化とハイテクノロジーによつてさらに磨き上げることが、新しい時代の世界に通ずるもてなし文化の創造につながるであろう。

(3) 旅の楽しみ

「スポーツ」と「もてなし文化」に続いて「遊び・レジャー」で取り組んだテーマが、現代日本人の余暇活動として最も人気の高い「旅の楽しみ」である。

生活の中での旅の意味・魅力を探るためには、旅行愛好者の意識調査が必要となるため、生活研究の専門シンクタンクとして実績のある京都の株式会社シー・ディー・アイ（以下C D I）に協力を依頼し、共同研究という形でプロジェクトを進めることになった。

「花の楽しみ」調査で実施した広く一般からのエッセイ募集という方式を採用し、一九九二年十一月に「楽しかった旅・今夢中になつて旅」というテーマで、一般の方を対象にコンテストを実施したところ一四二二名からの応募があつた。優秀作品の選考には、栗田靖之国立民族学博物館教授・佐藤健二法政大学助教授・白幡洋三郎国際日本文化研究センター助教授とC D Iおよび不易流行研究所の担当スタッフがあつた。いずれの作品も旅の貴重な体験が表現されており審査は難航したが、最終的に「特別賞」五編と「楽しい旅賞」一七編の計二二の入選作を選んだ。入選作を含め、さまざまな旅のバラエティを紹介するために、エッセイ集「旅の楽しみ」を編集し発行した。⁽¹⁾ 家族や友人とのふれあい、人との出会い、珍しい体験、思いがけないハプニング、テーマを持った旅、「自分流」のユニークな旅……それぞれが生活を彩り、人生の宝物ともなる、現代人にとつての旅の意味を示す生きた資料となつている。

一方、エッセイ応募者を対象に旅についてのアンケート調査を実施し、旅好きと考えられる人の旅行に対する意識と行動を分析した。こつたデータをもとに、旅行に関する政府統計はじめ一般的な各種調査との比較検討を行い、選考委員とC D I、不易流行研究所のメンバーで検討・議論を深めた。旅好きの人たちの意識と行動は今後の余暇活動における旅行需要増大の先行指標になるものと捉え、「旅好族」と名付けた。その研究成果を、報告書『「旅好族」の研究―旅が生活を変える―』としてまとめることができた。⁽²⁾ また、九三年十二月には、東京青山のスパイラルホールで、「一億総ツーリスト時代の旅」と題して、公開フォーラムを開催した。

旅の楽しみと活用術を身に着けた「旅好族」の人たちが示した旅のありかたは、今日の個性的で主体的な旅の流行を先取りするものであつた。人とのつきあいを深めるため、特別のテーマを探索するため、自分流に余暇を楽しむため等様々な目的に旅が活用される。まさに旅が生活と人生を変える時代が到来しつつあると実感したのである。

その後、ツーリズム・観光が脚光を浴びる時代となり、従来の団体型旅行からさまざまな着地型観光やコンテンツ・ツーリズム、インバウンド・アウトバウンドを含めた海外旅行の普及などの潮流をみるとき、「旅の楽しみ」の研究は今でもその価値を失つてはいないと考えられている。

6. つきあい・社交文化

つきあい・社交は生活文化を豊かなものにするために不可欠のフアクターである。日常生活の中の衣食住も、レジャー分野における「もてなし」も、人とのつきあいを抜きにしては考えられない。

つきあいといっても、最も身近な家族という血縁から、近隣に住む人との地縁、学校や勤め先を始めとする社会縁、さらには趣味やインターネットでつながる「選択縁」と言われるものまで、さまざまである。

不易流行研究所では、まずつきあいの原点とも言える家族のつきあいに着目し、それとともに、知人・友人とのつきあいや社交の場とも言える「集い文化」を考察した。

(1) 家族のつきあい

現代家族のつきあいの実態を探るために、家族全員が関わる家庭の行事を手掛かりにした。幸い九〇年秋、強力なパートナーCDIとの共同研究という形が実現し、専門家として、井上忠司甲南大学教授・岩見和彦関西大学教授・栗田靖之国立民族学博物館教授・篠原徹国立歴史民俗博物館助教授に研究会委員として加わっていただいた。

調査は、東京・大阪・新潟・広島各都市圏から一〇〇ずつ計四〇〇家族をモニターとして募集し、家族恒例の家庭行事について、毎月その実施

内容を具体的に写真付きでレポートしてもらったという大変なものであったが、九割を超える三六六家族が一年間熱心に報告を続けられたことには、我々のほうが驚いたほどであった。

貴重なデータから明らかになったことは、伝統的年中行事や新しい行事の変遷、実施スタイルの変容、家族の絆・つきあいに果たす役割から生活を楽しく彩るイベントとしての工夫などの興味深い事実であった。地域差・年代差・同居家族の構成等による多少の違いはあるが、表2のとおり、正月・クリスマス・お盆・節分・家族の誕生日といった実施率の高い行事は、日ごろバラバラになりがちな現代家族のメンバー全員が集う機会として大切にされ、コミュニケーションの場

〈表2〉 家庭の年中行事 実施率ランキング

Part I 調査			Part II 調査		
1	正月	92.7%	1	正月	99.4%
2	クリスマス	79.4%	2	正月の準備	94.0%
3	節分	61.5%	3	大みそか	89.8%
4	お盆	60.3%	4	クリスマス	83.7%
5	子どもの誕生日	60.3%	5	お盆	80.7%
6	夫の誕生日	55.1%	6	節分	74.7%
7	ひなまつり	49.1%	7	夫の誕生日	68.1%
8	行楽	46.2%	8	子どもの誕生日	68.1%
9	夏季休暇	44.4%	9	バレンタインデー	65.7%
10	大みそか	44.0%	10	母の日	62.7%
11	結婚記念日	43.6%	11	妻の誕生日	59.6%
12	運動会	43.6%	12	ひなまつり	59.0%
13	正月の準備	41.9%	13	ゴールデンウィーク	58.4%
14	妻の誕生日	41.9%	14	夏まつり	58.4%
15	母の日	41.5%	15	花見	57.2%
16	バレンタインデー	37.6%	16	夏季休暇	54.8%
17	父の日	32.1%	17	父の日	54.2%
18	夏まつり	32.1%	18	結婚記念日	48.2%
19	こどもの日	29.1%	19	七草	45.2%
20	旅行	28.2%	20	小正月	44.6%

Part I 1991年10月～92年9月 回収数234

Part II 2001年1月～12月 回収数166

サントリー・不易流行研究所 + CDI

「現代家庭の年中行事」2003年より

としても活用されている。

この研究・調査をもとにした報告書は、九二年六月に「現代家庭の年中行事」⁽¹³⁾として作成し、さらに井上忠司教授の尽力により、講談社新書の一冊として出版し、広く一般家庭の家族のつきあいのためのヒントを提供することができた。⁽¹⁴⁾同書の中で、井上教授はこう述べている。「家庭生活を一週間の単位ではなく、一年間の単位で考えてみては、どうだろう。一年のタイムスパンで考えると、家族のメンバーが週にいくど食卓をかこむか、などということは、さして大きな問題とはなりえない。家庭の現状はかならずしも嘆くにあたらないのである。発想の転換ひとつで、家庭がなにがしか活性化すること、請け合⁽¹⁵⁾いである。」

なお、その後の変化を見るために、十年後の二〇〇一年にもほぼ同様の調査を実施し、「現代家庭の年中行事 Part II」として報告書にまとめている。⁽¹⁶⁾

(2) 都市生活におけるつきあい

家族だけでなく、近隣・学校・職場その他さまざまな縁を通じての現代人のつきあいについては、研究所創設時以来、東京のボーラ文化研究所との共同研究を重ねてきた。世代・男女・家族構成・職業等によるつきあひ意識の違いを詳細に見るため、九一年夏に首都圏に住む男女一〇〇〇名を対象にアンケート調査を実施した。

都市化・核家族化・女性の社会進出といった時代背景によって、つ

きあいは大きく変わりつつある。依然仕事中心の男性のつきあひに対して、女性のつきあひは多様な広がりを見せている。また世代が若くなるにつれて、家族や友人とのつきあひ方は従来と比べ顕著な変化を示している。たとえば、かつては全人格的なつながりだった「親友」という関係も、今日では仕事や趣味などに限った部分的なつながりであらえている人が多い。情報化社会の進展により、現代人のつきあひは広く浅く多様になりつつある。こうした調査・分析結果を九三年三月にボーラ文化研究所と共同で、「都市生活者のつきあひ」という報告書にまとめた。⁽¹⁷⁾

(3) 集いの文化

つきあひ・社交の端的な場とも言える集いについては、日本の特色を明らかにするため、海外の集い文化に詳しい専門家を交えて、九一年に研究プロジェクトを発足した。メンバーは、端信行国立民族学博物館教授・井上忠司奈良女子大学教授・熊倉功夫国立民族学博物館教授・小林章夫上智大学教授・園田英弘国際日本文化研究センター教授・橋爪紳也京都精華大学助教授・深井晃子京都服飾文化研究財団チーフキュレーターの七名で、他に必要に応じてゲスト報告者を招いた。

毎回の研究会が集いの実践の場ともなり、ホテルでのパーティーから本格的茶会体験までさまざまな集いの場の観察も加えて、五年間研究を続けた。

集いの要素として、人（メンバー）・目的・場所とともに飲食・会話・芸能などの趣向が重要であり、衣食住の生活文化と深く関わっていることが明らかとなった。イギリスのクラブ・フランスのサロン・アメリカのパーティーなど欧米の会話・社交を中心とする集いに比べ、宴会文化の伝統を受け継ぐ日本の飲食中心の集いの姿が浮き彫りになった。

研究成果は端信行教授の監修により、全メンバーが執筆し、「宴会とパーティー―集いの日本文化」と題して、九五年十二月に出版した⁽¹⁸⁾。同時に、東京・青山のスパイラルホールにおいて、「新しい日本文化の創造」というフォーラムを開催し、研究成果を発表するとともに、研究メンバーと参加者との交流をはかるカジュアルなパーティーを試みた。

7. 芸術・芸能の楽しみ

現代都市における芸術・文化を楽しむ場としての劇場・ホールとミュージアムを取り上げ、生活文化の視点から調査・研究をおこなった。この分野において実績のある、びあ総合研究所の力強い協力を得て、文化施設をめぐる多面的な調査を実施することができた。

(1) 劇場をめぐる楽しみ

一九九〇年からプロジェクトをスタートし、九一年には劇場・ホールが集中する首都圏を中心に、観客と施設の実態調査を実施した。テ

レビやビデオ・パソコンなどのメディアが普及する中で、劇場・ホールに熱心に足を運ぶ人たちの意識と行動を探るのが主眼であった。二年前にわたる調査・研究の結果、劇場・ホールでしか味わえないライブの魅力や観賞に付随するさまざまな楽しみの実態が浮かび上がった。あわせて、都市生活の中で文化施設の果たす役割も明らかになった。

これらの結果をまとめて、「劇場をめぐる楽しみの構造」という報告書を九一年十二月に作成した⁽¹⁹⁾。

(2) ミュージアムの楽しみ

一九七〇年代以降、日本の美術館・博物館は急増した。数だけでなくその中身が大きく変わりつつあり、私たちはその変化の実態を現場調査により把握しようとした。国公立の施設ばかりでなく、民間の美術館や企業博物館、さらには海外のミュージアムも含めて現地調査を実施し、ミュージアムの社会的意義とユーザーにとっての魅力という視点からの検討をおこなった⁽²⁰⁾。

美術館・博物館は従来の啓蒙的・教育的イメージから、近年のテーマパークも含めて、より娯乐的・文化的な要素を持つようになりつつある。調査の結果から、人々にとって魅力的なミュージアムとは、①設立者の思いがテーマに明確に表れていること②テーマにふさわしいモノと情報が編集されていること③わかりやすく楽しい展示・演出が工夫されていることの三点を備えている施設であると確認できた。

劇場・ホールにしても、ミュージアムにしても、そこでしか味わえないオリジナルな情報・出来事があり、文化施設としてのハレの場的な華やかさ・雰囲気があり、訪れた人が誰でも楽しめる演出があることが、人々に感動を与える文化施設と言えるだろう。

8. 酒の楽しみ

生活文化の基本となる衣食住については、研究所発足当初から基礎研究的位置づけでスタッフ全員による調査研究を続けてきた。関連図書・資料の収集・分析を始めとして、所内の研究会や社内向けのレポート・報告会などを随時実施してきた。

とりわけ酒文化については力を注ぎ、時代を映す鏡とも言える若者の飲酒行動と意識を探索調査・研究を九二年から九三年にかけて継続的におこなった。メンバーには、社内広報部の若手メンバー二名も加わり、調査の設計・分析には関西大学社会学部の岩見和彦教授の熱心な助言と指導を得て、現代若者の飲酒行動の実態に触れる興味深い調査と研究を続けることができた。

飲酒という側面から見た現代若者像として、①男性に比べて女性が多い元気で積極的なこと②上司や先輩とはそれなりにうまく付き合うが、深酒やしこ酒などは好まない③仲間とは、居酒屋やカラオケで盛り上がるが、二次会・三次会などは好まず、切り替えが早い④さまざまなメディアを通じて流行をキャッチし、定番をおさえておくとい

う情報志向などの傾向が浮かび上がった。これらの潮流は今日の若者にも通じている点が多い。

若者だけでなくひろく現代人の酒の楽しみを探索するために、「花」・「旅」の場合と同様に、一般から「楽しい酒・心に残る酒」というテーマで九五年にエッセイを募集した。インターネットでの応募を含め、全国から二二〇九篇の作品が寄せられた。

酒は日常生活の「句読点」として、ハレの場に欠かせない彩りとして、人と人とを結ぶ潤滑油として、多彩な楽しみの源泉として、人間の喜怒哀楽とともにあり、貴重な役割を果たしていることを示す作品ばかりであった。その中から一五九篇を選んで、『多酒彩々』と題して出版した⁽²⁾。さらに、九八年末から九九年初にかけて、「私とお酒のホットな関係」というテーマで今どきの酒についてエッセイを募集し、前回を上回る二六六四篇の作品が寄せられ、『グッドタイム・グッドバー』として編集・出版している⁽³⁾。

また、酒文化全般については、財団法人日本醸造協会内に設けられた「飲酒文化を考える会」に参加し、「近代工業化社会が生んだウイスキー」「日本映画と酒」というテーマで、不易流行研究所スタッフが研究論文を作成・発表した。これは九七年に社団法人アルコール健康医学協会により発行された『シリーズ酒の文化』第三巻の『酒の社会史』に収められて刊行されている⁽⁴⁾。

一方、二〇世紀の一〇〇年を振り返り、二一世紀の酒文化を展望する「酒の一〇〇年」研究プロジェクトを九六年に開始した。メンバー

は、劇作家・評論家の山崎正和東亜大学大学院教授を主査に、井野瀬久美恵甲南大学助教授・鹿島茂共立女子大学教授・熊倉功夫国立民族学博物館教授・宮本又郎大阪大学教授・鷺田清一大阪大学教授にサントリーのメンバーが加わった。毎回各界の専門家をゲストに迎えて、酒の哲学・歴史・経済から醸造学にいたるまで計十六回の研究会を実施し、酒文化について多面的に議論を深めた。研究成果をもとに、九九年に山崎正和監修『酒の文明学』として出版している。⁽²⁴⁾

同書最終章「酔いの現象学」の中で、山崎正和はこう結んでいる。「悲しんで酔う。喜んで酔う。人に会って酔い、人に別れて酔う。人生は多様であり、そのたびごとの感情も多様である。（中略）人生の多様性を愛し、それに耐えるだけの強さを持った人は、文明の歴史を超えて、いつまでも一々の酔いを愛することである。」⁽²⁵⁾

9. 都市の魅力

現代文化の主たる舞台となる都市については研究所発足当初からスタッフを中心にフィールドワークを含めた調査・研究を実施していたが、それと並行して文化施設を中心に都市の魅力を探求する学際的研究会を九一年以来五年間にわたって続けた。米山俊直京都大学名誉教授を主査として、大塚和義国立民族学博物館教授、評論家・文化プロデューサーの河内厚郎、谷直樹大阪市立大学助教授、橋本敏子生活環境文化研究所所長、鷺田清一大阪大学助教授のメンバーにより、各界

の専門家を招いての議論も交えて、研究調査をおこなった。

古代ローマから日本の江戸時代に至る都市の歴史の中で文化の役割、万国博・オリンピックを頂点とする文化イベントから祭りや神社、劇場・ミュージアム・アミューズメント・商業施設、盛り場などのさまざまな文化施設・装置の魅力を俎上に載せ、都市文化の不易流行を探った。

研究成果をまとめ、九六年にNHKブックスの一冊として『都市のたくらみ・都市の愉しみ』というタイトルで出版した。⁽²⁶⁾ その中で米山俊直は、これからの都市を考えるにあたって、「都市の感性」が重要となると指摘し、「アメニティ・景観といったアポロ的な清潔・健康・秩序といった世界と喧騒・猥雑さといったディオニソス的な要素との両面を、都市の表と裏、光と闇としてともに捉えていくことが、文化施設とその活用を考えるときに重要となる」と強調している。⁽²⁷⁾

このプロジェクトが起点となって、都市の文化施設、都市の界限・盛り場といったテーマはその後も継続して深掘りしていくことになる。九四年、鳴海邦碩大阪大学教授の指導を得て、大阪ミナミの法善寺横丁の調査を実施した。同界限の飲食店ほぼ全店の協力を得て、界限の実地調査だけでなく、飲食店へのインタビュー調査と来客へのアンケート調査を実施することができた。法善寺横丁という狭い一角が、明治以降幾多の時代の荒波を受け変貌を遂げながらも、多くの人に愛され、今日もなお賑いを見せるまさに不易流行の魅力を備えた盛り場であることが確認できた。来客は中高年男性ばかりでなく、近年

では若者・女性の利用も増えている。どの世代にとっても、法善寺横丁の魅力として「やすらぎ」がキーワードとなっており、界限性の一つの象徴である。研究成果を、「店がつくる界限」という報告書にまとめ、九五年に発表した⁽²⁸⁾。

鳴海邦碩は法善寺横丁研究の意義を次のように述べている。「盛り場を歩くことは日本人にとって大きな楽しみの一つであり、目抜き通りとそれに連なる横丁や路地で形成される界限は、盛り場の魅力の環境を形成している。そうした界限の魅力を支えているのは、その複雑さであり、それは空間の小規模性に基⁽²⁹⁾づいている。この小規模性もたらす業種の多様性が、人々の生活スタイルにうまくフィットし、さらには〈営業する個々人の能力や意欲を十分引き出す仕組み〉をもちてきたのである」⁽³⁰⁾。

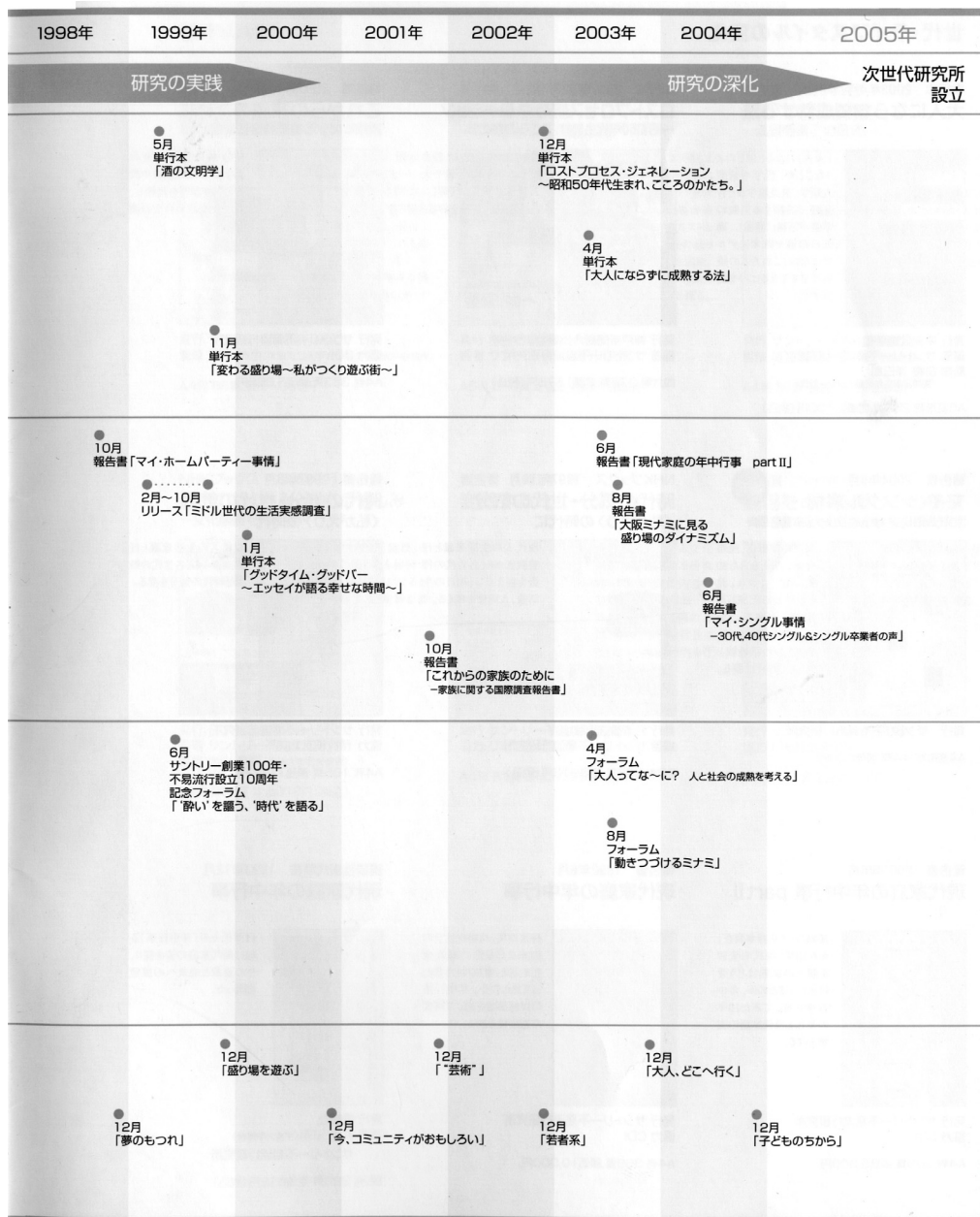
盛り場の研究は、都市の魅力・都市文化の重要なテーマとなり、その後大阪以外の各都市の象徴的な盛り場・界限のフィールドワーク・調査研究を深めていくことになる。九九年には、各地の調査結果をもとに「変わる盛り場」を単行本として出版し⁽³¹⁾、二〇〇三年には、法善寺横丁も含めた大阪を代表する盛り場・繁華街ミナミを詳しく調査した結果を、橋爪紳也大阪市立大学大学院助教授監修のもとに、報告書「大阪ミナミにみる盛り場のダイナミズム」にまとめている⁽³²⁾。

10. 生活者の意識と行動

生活文化の主役である生活者の全体像については、これまでの調査・研究を踏まえて、二一世紀の生活像を探る総合的な調査・研究に取り組んだ。仕事や学習、家庭生活、余暇活動など生活全般を視野に入れ、新しい時代環境のもとでの人々の価値観・意識から行動にわたる幅広い調査を、首都圏在住者を対象に九五年七月からおよそ二年間継続実施した。

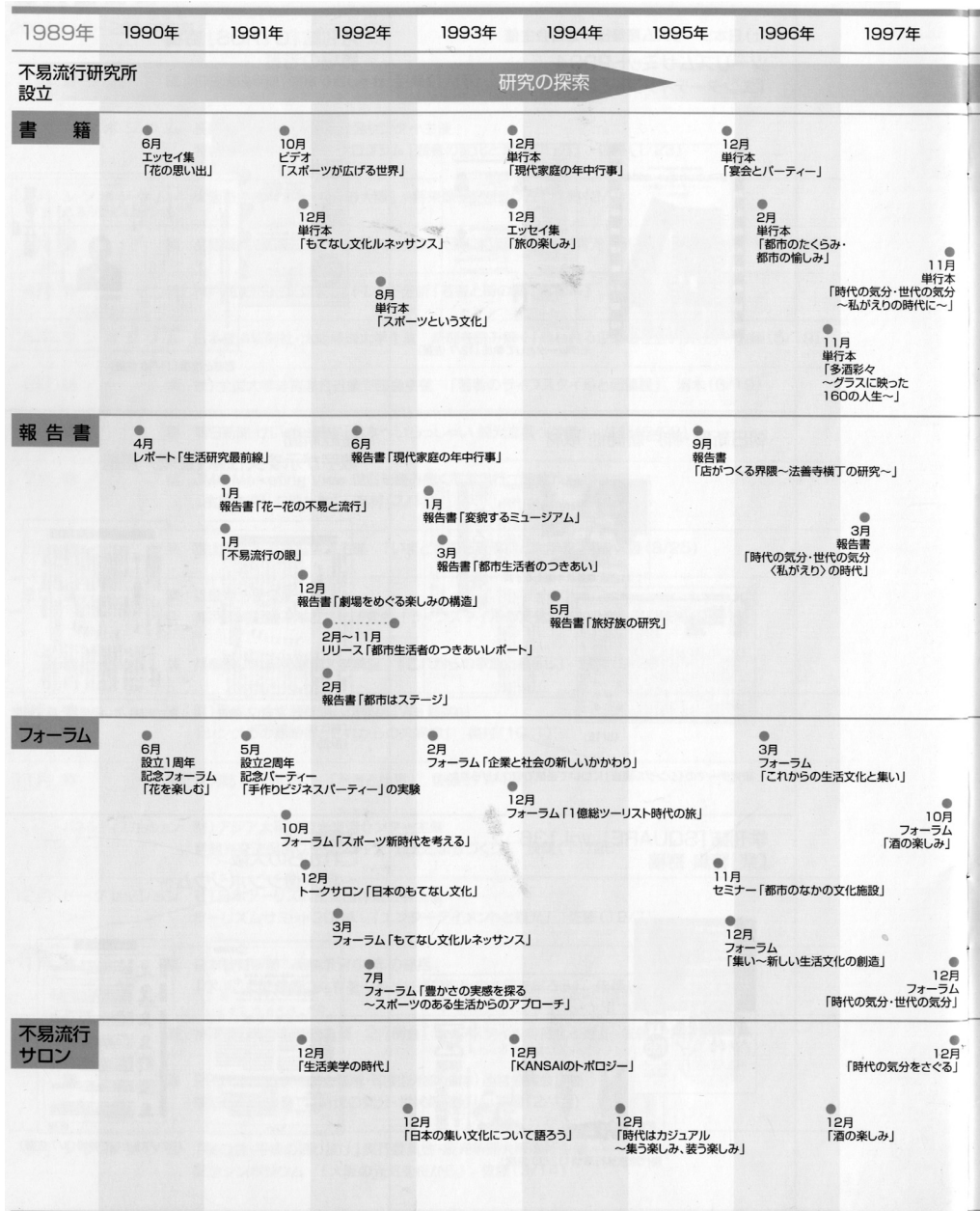
調査結果を、九七年三月に報告書および単行本『時代の気分・世代の気分⁽³³⁾』してまとめた。要点は、タイトルに示されたとおり、工業化による経済成長後の情報化社会や少子・高齢化、女性の社会進出といった時代の潮流が人々のライフスタイルに大きな影響を与えていることと、戦後の昭和から平成時代への変化の波が急激であつたために、世代ごとに意識と行動に相違が見られたことである。この調査を通じて、私たちは世代ごとのコーホート分析を重視し、出生から成人、老後にいたるライフコースをそれぞれの世代が直面した時代環境とともに分析した。高度経済成長期までの、修学・就職・結婚・出産・子育て・退職という典型的なライフサイクルは、若い世代では画一的なものではなくなり、〈私なりに・自分らしく〉という志向が強くなりつつある。高齢者世代でも、かつてない長寿社会を迎えて自分らしい人生を模索している。

若い世代さらには次の世代が、二一世紀の新しい生活文化を時代の「流行」として創り出していくであろうが、自分らしい豊かな生活・



サントリー-不易流行研究所年報（2004年）

(図2) 不易流行研究所16年のあゆみ



人生を求めるといふ志向そのものは「不易」であろう。

なお、この世代別に掘り下げた生活者の意識と行動というテーマは、その後も継続して取り組まれ、「ミドル世代の生活実感調査」、「マイシングル事情」などの報告書や、単行本『ロストプロセス・ジェネレーション』として発表されている。⁽³³⁾

こうした世代別の研究・調査の蓄積は、後の二〇〇五年に不易流行研究所から次世代研究所に移行する際の柱ともなっている。

不易流行研究所から次世代研究所へ引き継がれたテーマの一例をあげれば、一九九七年からスタートした「成熟社会のライフスタイル」研究プロジェクトがある。

この研究は、高度経済成長後の日本社会の特質と新しい時代における人々の価値観・生活意識の変化と生活スタイル・ライフデザインを、「成熟」とは何かということを手掛かりとして展望するものである。

白幡洋三郎国際日本文化研究センター教授を主査に、鷲田清一大阪大学教授、奥野卓司関西学院大学教授、山極寿一京都大学大学院教授、小長谷有紀国立民族学博物館教授といった学際的メンバーによる熱心な議論が、一〇年間にわたって続けられた。二〇〇三年には『大人にならずに成熟する法』という本が中間報告的に出版されている。⁽³⁴⁾

また二〇〇八年には、一〇年間の議論を振り返って、研究メンバーによる座談会が開かれ、その内容を収録した冊子が作成されている。経済的に豊かな社会イコール成熟社会でもないし、人間は単に加齢によって成熟するものでもない。社会の成熟と人間の成熟との関係を深

くとらえ、明日の日本社会のあり方を考える際にも意義のある興味深い議論が展開されている。白幡洋三郎によれば、成熟社会のイメージは、社会と個の関係において無用な衝突や混乱の少ない社会であり、誰もが「おだやかで、明るく、面白く生きられる社会」ということになるであろう。⁽³⁵⁾

11. おわりに

九八年三月の異動により、筆者は経営企画部へ転任となるが、その後も後任の佐藤友美子部長と狭間恵三子課長を中心としたスタッフにより研究活動が継続・深化されていた。特に生活文化の主役である生活者の意識と行動に関する研究は、世代別調査により発展されていた。

二一世紀を迎え、所期の使命を終えた不易流行研究所は、二〇〇五年三月に次世代研究所と改称し、それまでの幅広い生活文化分野の研究から、新しい時代を担う子ども・若者を中心とした次世代の生活意識・行動の研究に特化し、社内外に問題提起と情報発信を続けていくことになる。

一九八九年発足以来、一六年にわたる不易流行研究所の活動は、ちょうど二〇世紀末から二一世紀への転換期に符合し、経済的豊かさから心の豊かさへと人々の関心が広がる時代に直面していた。生活という視点から見ると、仕事と衣食住という基盤に加えて余暇活動が重

要なファクターとなり、それらのバランスの上に幸福な生活や人生が成り立つ。「クオリティ オブ ライフ」や「ワーク・ライフバランス」といったことも、生活文化を抜きにしては考えられない時代が到来している。

生活文化について、不易流行研究所が投じたいくつかの石は、継続的なネットワークの輪となり、社内だけでなく行政・経済界・大学・研究機関等に波紋を広げることができたことは幸いである。

成熟社会のライフデザイン・ライフスタイルは、まだまだ確立したとは言えず、これからの社会的課題である。しかしながら、これまで培ってきた日本人の生活文化の中には実現のためのヒントが豊かにあり、新しい時代にそれを活かすことが不易流行の精神に他ならない。

最後に、不易流行研究所の副次的成果として、スタッフの人材育成効果をあげておきたい。一々名を挙げなかったが、自ら考え行動するネットワーク型研究活動により、多くのスタッフが自己啓発に努め、研究所勤務後は社内の文化事業関連の分野ばかりでなく、大学教員や行政・公益団体等の役員や委員としても活躍している。これも、ささやかな社会貢献と言えるかもしれない。

(文中敬称略。所属・役職等は当時のもの。)

注

(1)「三冊子」のうち、「赤冊子」の冒頭部分。南信一『三冊子総釈改訂版』風間書房、一九八〇年参照。

- (2) 佐治敬三「何が不易流行かを掴め」『週刊東洋経済』1989・11・4 86-87ページ参照。
- (3) サントリー文化財団生活文化研究所レポートとして、山崎正和編『都市開幕』TBSブリタニカ、一九八八年、蛭山昌一編『二世紀へのライフデザイン』TBSブリタニカ、一九八九年が出版されている。
- (4) 谷直樹監修『都市はステージ—大阪の魅力—』サントリー不易流行研究所、一九九二年
- (5) サントリー不易流行研究所『エッセイ集「花」—花の思い出—』一九九〇年
- (6) 守屋毅監修『花の不易と流行』サントリー不易流行研究所、一九九一年
- (7) サントリー不易流行研究所『スポーツのある生活』一九九二年
- (8) サントリー不易流行研究所編『スポーツという文化』TBSブリタニカ、一九九二年
- (9) 同上書9-10ページ
- (10) 星野克美、サントリー不易流行研究所『もてなし文化』ルネッサンス『TBSブリタニカ』、一九九一年
- (11) サントリー不易流行研究所『エッセイ集 旅の楽しみ』一九九三年
- (12) サントリー不易流行研究所、C D I『旅好族』の研究—旅が生活を変える—一九九四年
- (13) サントリー不易流行研究所『現代家庭の年中行事—三六六家族からの報告—』一九九二年
- (14) 井上忠司、サントリー不易流行研究所『現代家庭の年中行事』講談社、一九九三年
- (15) 同上書13ページ
- (16) サントリー不易流行研究所『現代家庭の年中行事Part II—平成ファミリー—〇〇年の変化—』二〇〇三年
- (17) ポーラ文化研究所、サントリー不易流行研究所『都市生活者のつき

あい』一九九三年

(18) 端信行監修、サントリー不易流行研究所編『宴会とパーティー——集いの日本文化』都市出版、一九九五年

(19) サントリー不易流行研究所、ぴあ総合研究所『劇場をめぐる楽しみの構造』一九九一年

(20) サントリー不易流行研究所、ぴあ総合研究所『変貌するミュージアム』一九九三年

(21) サントリー不易流行研究所編『多酒彩々——グラスに映った一六〇の人生』たる出版、一九九六年

(22) サントリー不易流行研究所編『グッドタイム・グッドバー——エイが語る幸せな時間』エピック、二〇〇〇年

(23) アルコール健康医学協会編・発行『酒の社会史』一九九七年

(24) 山崎正和監修、サントリー不易流行研究所編『酒の文明学』中央公論新社、一九九九年

(25) 同上書222-223ページ

(26) サントリー不易流行研究所編『都市のたくらみ・都市の愉しみ——文化装置を考える』日本放送出版協会、一九九六年

(27) 同上書18ページ

(28) サントリー不易流行研究所『店がつくる界限——法善寺横丁の研究』一九九五年

(29) 同上書10ページ

(30) サントリー不易流行研究所『変わる盛り場——「私」がつくり遊ぶ街』学芸出版社、一九九九年

(31) 橋爪紳也監修、サントリー不易流行研究所『大阪ミナミに見る盛り場のダイナミズム』二〇〇三年

(32) 報告書『時代の気分・世代の気分』およびサントリー不易流行研究所『時代の気分・世代の気分——「私がいり」の時代に』日本放送出版会、一九九七年

(33) サントリー不易流行研究所『ロストプロセス・ジェネレーション

——昭和五〇年代生まれ、こころのかたち。』神戸新聞社、二〇〇二年

(34) 白幡洋三郎監修、サントリー不易流行研究所編『大人にならずに成熟する法』中央公論新社、二〇〇三年

(35) サントリー次世代研究所報告書『成熟社会をめぐる議論2008〈最終章〉「おだやかで、明るく、面白く生きられる社会」のために』による。